



明
2902
新更400
分止

世不復見

左野
子

子
子

子
夜田

子
子

子
子

子



福徳過報喇卷之八

目錄

江戸屋

小西

角

1000

福徳過報 卷之五
 江戸屋敷 五
 古郷へハ錦を寄附といへと大かたの志也云んつ
 て乃中の系立虫といふ毒虫ふらまきとく通く
 加鳥珍の入り小珍へ一合成はるぬ。江戸にて女
 太といふ盗人ぬ出合まきとくと又とわく取を
 かくしてハ付を東海乃雲舟ふちられたり。ま
 むく京初ふ江戸屋敷合まきとくと長崎表へ
 子代とけりり。福物業種本の入れとて

福徳過報 卷之五

江戸屋敷 五

古郷へハ錦を寄附といへと大かたの志也云んつ
 て乃中の系立虫といふ毒虫ふらまきとく通く
 加鳥珍の入り小珍へ一合成はるぬ。江戸にて女
 太といふ盗人ぬ出合まきとくと又とわく取を
 かくしてハ付を東海乃雲舟ふちられたり。ま
 むく京初ふ江戸屋敷合まきとくと長崎表へ
 子代とけりり。福物業種本の入れとて

高ひ致しる時ふも代ふ在る處とくずい分
 実御めくさ人へも大切ふきまへ母親へと存
 行るるしるあしに長湯たうりすの心か
 友ならふしるも是れたしといふ勢城町へ行く
 名ふといふ女帝ふ別深るる名いふ夜志やん
 せりるふむうきた大内桐二堂はりの瓢箪
 るるも名物の切も海きんと思ふ程の古
 今縁あつたなをいふ夜志やんともお夜
 とおひんがけく屋人のまんのこき酒との

ど人通いどち人海を海にせん。すう。十らるると
 かくまよでのたまりいと京へ使ふ今織のこてあ
 元金のどろといた素人のましく申廣ひらのもあり
 まかお武友なをわらうあ人の妻と竹夜志やん
 せんらうら入書くはる日用の物は結とく名いふが
 かへりいふまのしと物がたししおとせお湯と
 さいらうなうらるるるるるるるるるるるるるる
 きがいていふまのしとく唐紙の色と次身ふお紙
 入れとはおるまのしとく京紙へのちるもちうらるる

京の大事の事なり事しむるに又ちの事なれば
 づといふも切あへん事なりおとすもあはれど
 と小首をあはれむ事なり事しむるに又ちの事なれば
 十中村七三が領地なるの紅形守ありとも
 ありや一書なりとてこゝろもあはれむ事なり
 たちらの事なりとて事しむるに又ちの事なれば
 殊をたしむ事なりとて事しむるに又ちの事なれば
 とよみ洞と名なりとて事しむるに又ちの事なれば
 ありとて事しむるに又ちの事なれば

せんも事なりとて事しむるに又ちの事なれば
 とよみ洞と名なりとて事しむるに又ちの事なれば
 ありとて事しむるに又ちの事なれば
 とよみ洞と名なりとて事しむるに又ちの事なれば
 ありとて事しむるに又ちの事なれば
 とよみ洞と名なりとて事しむるに又ちの事なれば
 ありとて事しむるに又ちの事なれば
 とよみ洞と名なりとて事しむるに又ちの事なれば
 ありとて事しむるに又ちの事なれば
 とよみ洞と名なりとて事しむるに又ちの事なれば
 ありとて事しむるに又ちの事なれば

ぶが古人多様乃夜々を自分のほくら入はく人
 には月と遠るはまじぶ又こと外はまじく強者
 へゆりいゝぬこのため二あるしてむげなひ実
 悪の身ゆゑく小玉根二つ二つ荒れおはし
 売子のちここのかまの又ふつこのと縁へ入
 えやあましくせりちけなふくも根の或は夜も
 くれく庵ん死くやかんをうとちまはうくまふ
 ぶく愛くこのぼくおち取のい合とと京郡
 へのやうく人合ま湯旅の番ひとも勘定い合

おとて旅の事部と体たれば件の夜具を自
 利へ見せたりがたふちある上代縁起の全様
 めく去るとみ七の桐の小とゆめく茶かけの一
 文字の風帯茶入の袋はふ真の巻子飾り入角
 の阿ふ右夜具全二百枚余ふたりなまこハ一
 えふ出来たこととて今も備へて物居りしてと
 親へとは茶ちりめんの上ををせ又人の高ひ
 とか移く自分の高ひもあつてあつて名心ひが
 形で一かどの高人ふちりなまこは終ふ名心と夜

お京へはきこしり。唐物高ひして母を屋
しるひ殿と身よあしりくちりしとや記

小西太き場

常乃小あでも御代八目出たわ若松様と云ハ
あし。何事なるうね石堂丸といはたふやふ
俊心がたろ大坂淡路町まじの裏店ふ小西
太き場とく業程の問屋へま入り高ひの丸次
しりすらひ申おごごの口張をたききしり
が来は年とくしりやね後系とらるやうふ

しりぬくと心をあくるまをさくまふり太き場と
ふふいしゆゆふせはちまきとて後せせしり
は。河内の玉串ふ伯父坊をとりく存まは行徳
たまは是へ姓くおあふなさんさて河内の玉串
へ新伯父坊をばおくおせいりふ太き場若病
あむくもたまりしうあゆのまきく身とくしりふ太
き場やんすらひ高ひ口張く後せしり太き場
まきく後張くおふくたうも身とくおふか様ま
すのふ依く。お京ふ成く他ゆしとて業程とさう



河内守のてい

ちまひ
さくら
さくら

福五

〇六

まま。仰交坊をうけつゝ人あり先は後黄の取
 中をきく人あり引け百日斗もはさみあふ
 中ね日あり所化才子たといふあめうせつ時ふ記
 し仏だんのをたさうら板をさう縁香をた
 てる常香をさるめあつ時ふの續をほく物
 中うしうらふうとを立所神火をさるあふ又う
 法を後ゆ明ふつ時あふ粥をたふるをたれも我
 まふらふまらふと強も強く伏あふとを
 粥とまふも雷合つたぐく仏だんまらふあふ

志すつとしてまより惣門のわたり本堂の縁
 の下まぐらたさうらまらふとをたれも我
 う池がさかをたうあまは後や細魂でゆい
 けりそ合の粥後ハ屋つくと同とさうくと氣と
 をりある粥と非時りあふる九つのか縁をほく
 又強陀羅尼を唱へつけふ香相ふかりぬ時
 せつをたれもまらふ又らんさうばのはさうら
 ころかくとればせつあもたらふ又仏だんへ火を
 ほくあふた縁のあふあとのをたぐくたい

て強と初めく、礼ねと九ね連たなま居とる
夜ふ入まバ村方へ出ぬ此入用の物と酒へる樽
用がのまバ勤る一日ふ三合するをい喰せとをま
情とあしきも思かきく歩行もあくなりかて
三十四日神といぬあふ家。ちき清思ふはけ三
ヶ一かせぐなすい心妻く泣せがなる今中をへ
夜ハ友たらう外く浄る本をよむ三味深
せひく酒のそはのと九つ八つ時ふ寐く寝る
ハにうさふ起ぶりく歩行く或ふよとまふ

けると友たちのあへまあ没若の伴判やよる
のあし何人あまきく日城くし夜ふ入ると又酒
の肴乃とあ合喰ひつてよあ事しせだ
け寺の法との三分つと情やたふばお家り
ぬふ及びまあひくさして大あやせとまき
伯又坊へ中ハ私ハ大坂へゆり又くえの南ハ
波なや舞りしつとさふたふ依く臥と
うごふをたけりくあくハ喰ま怒坊まらあ
と思ふべうごまあしく坊ん中へし寺没と云

そのハ隙がらふい冬氣ふたまにバ綿香成やだ
けた福をまらあこさむしゆはたさあすのき
清きあるとしてはひさかしくく産得とら
イヤいあゆみのませあく大坂へゆりく。あか
大さふまをゆいためはせりな色ハ九種いやく
たうはふのき屋へおとく業種ハせをゆりく
書あもむび無器して書りく。ゆ又坊と入
方便むの事とゆり人感ふゆりく。

福徳之報喇卷之六終

根

何

えや

あ
あ
あ

あ
あ

あ
あ
あ

あ
あ
あ

